

山の作家宇江敏勝の近著『狸の腹鼓』を読んだ。

著者は1937年、熊野の山中で炭焼きを業とする家に生まれた、原木を求めて山から山へ転々と移る幼少期だった。熊野高校卒業後も、炭焼の仕事が続けた。木炭産業が不況になると植林・下草刈りなどの造林の仕事に従事し、山をホームグラウンドとする生活を続けた。

山仕事のかたわら、山人の仕事、山小屋の暮らし、身近にいる動物など四季の生活を題材に文章を書き、『山びとの記』や『山に棲むなり』を著わした。

『狸の腹鼓』は、1960年代に熊野の山中で炭を焼いていた著者と思しき主人公が、霜月祭の当日かつて炭焼をしていた日置川源流の集落（田辺市下川上）を車で訪れた。昔の仲間はずでになく、今浦島の気分。木馬道だった林道を登り、崩れ落ちた窯と小屋の跡を見つめる。突然60年前の景色と少女のおもかげが浮かびあがる……。自伝的な恋愛物語。

初冬のある日、文通していた高校後輩の少女が炭焼小屋に訪ねてくる。家庭の事情に悩み、話を聞いてもらいたくて来たという。囲炉裏をはさんで二人は一晚語りあう。少女の悩み、生い立ち、読んでいる本、将来のことなど山の暮らしのことなどを話し合った。小屋に近寄る動物たちの話が少女を喜ばせた。

猪や鹿にも出会う。兎は罨で獲って食う。狸は夜になると小屋に近寄ってきて、捨てたご飯粒や魚のアラを食う。

「狸なんて、いつペン見たいわ」

「今晚は見られるかも知れんよ」

夜が更け、近くの木が揺れ、冷たい風が隙間から入る。枯れ木が屋根に落ちる音。

「ほら、狸が来とるよ。ブン…ブン…ブンというとるやろ」

「ええ、たしか聞こえるわ」

「狸が鼻で息を吹いて、落ち葉の下にいる虫けらを探す音が静かな林に響くんや。ポンプポンプと腹を叩いて踊るといって狸の腹鼓はこのことなんだ」

「炭焼は本当のことを知っているのね」

「朝まで起きていようか」

「好きな男の人がいるんです。そのことも聞いてもらおうと思って…」